

## フランス語

石川 三千夫

### 1. 我が国におけるフランス語教育の足どり

フランスの軍事顧問の助力を得ていた江戸幕府は、ドイツ陸軍やイギリス海軍の兵法を採用した明治維新政府の前に負け、さらに1870年の普仏戦争でフランスがドイツに負けたことも重なり、西洋列強の中では国力の上で、英国・米国、ドイツ、フランスという序列が付いた。新しい国造りをするのにこれらの国の文化を取り入れる必要があり、そのためにこれらの国に留学生を派遣するとともに国内では高等教育機関で母語話者による外国語教育が行われるようになった。それが高等学校令（1894）により設置された大学予科であった。この大学予科には第一部（法・文）、第二部（工・理・農）、第三部（医）があり、たとえば第一部では第一外国語を英語とするもの（一部英法、一部英文）、第一外国語をドイツ語とするもの（一部独法、一部独文）があった。このように外国語としては英語とドイツ語だけが教えられていた。その後高等学校令改正（1901）により尋常科（4年制）と高等科（3年制）からなる高等学校が設置されたのに伴い、既存の大学予科は高等科（3年制）と名称を改めた。高等科は、文科と理科に大別され、第一外国語と第二外国語を履修する必要があり、第一外国語科目として英語、ドイツ語、フランス語が置かれた。英語、ドイツ語、フランス語を履修する課程をそれぞれ文科甲類、文科乙類、文科丙類また理系では理科甲類、理科乙類、理科丙類と称していた。フランス語を第一外国語にする文科丙類を置いた高校は、第一高等学校・東京高等学校・浦和高等学校・静岡高等学校・第三高等学校・大阪高等学校・福岡高等学校があり、また理科丙類を設置したのは東京高等学校・大阪高等学校があったが乙類のドイツ語を置く学校よりも少なかった。この旧制高校の制度は1949年まで継続された。この間、私立大学もいくつか設立され、旧制高校に準じてやはり外国語として英語やドイツ語・フランス語が教えられてきた。戦前の高等教育はこのように英語・ドイツ語・フランス語を外国語とする教育がなされていたのである。

事情が変わったのは戦後の事で、教育改正（1949年）により、大学では専ら英語を第一外国語とし、ドイツ語やフランス語は第二外国語の地位におかれるとともにドイツ語やフランス語以外の外国語の選択肢も増えていった。今まで通り二つの外国語が必須であることには変わりがないが、第一外国語は英語である必要があった。さらに大学設置基準の大綱化（1991年）により、第一外国語、第二外国語の区別は無くなり、かつての第二外

国語を取らなくても卒業できることとなった。このことは、英語以外の外国語教育にとっては不幸でもありチャンスでもありえた。不幸というのは大学の経営上の理由などで英語以外の外国語科目の廃止や縮小を招き、学生の語学選択の幅が狭められることになり得るということである。とはいうものの、かつての第二外国語は英語と同じ地位についていたもので、桜美林大学ではこれをチャンスと捉え、英語以外の外国語の拡充を図り、上記 16 言語を順次設置し、特色ある大学たらしめんとした。「外国語の桜美林」と言われる所以である。すなわち、これだけ多くの外国語を学べる大学は珍しく、開講外国語の多さは旧外国語大学系の大学に次ぐものである。桜美林大学のこのような動向は、文部科学省の次のような指針にも沿ったものであった。

「急激に進展する国際化の時代にあって、大学の諸活動は、本来、最も国際的な視野を持って行われるべきものである。…国際的に活躍し得る人材の育成のため…には、民族固有の文化や価値観の相違に対する理解を深めることが必要であり、外国語教育をはじめ教育内容の在り方が重要になってくる。外国語教育については、開設科目が英語、ドイツ語、フランス語等の欧米諸国の言語に偏るこれまでの傾向が、近年は徐々に中国語、ロシア語等アジア諸国の言語にも広がっている」(文部科学省白書)

## 2. 桜美林大学におけるフランス語履修の現状

戦前の高等教育機関や戦後の大学において外国語の重要な一角を占めていたフランス語ではあるが、開設外国語科目の広がりとともに、その地位が相対的に低下してきた。桜美林大学ではとくに近年中国語、韓国語やスペイン語が漸次履修者数を増やしてきたのに対してフランス語の履修者人数は毎年安定しているため、上記外国語に大きく差を付けられてしまった。フランス語は日本の近隣の国の言語でもなく、また「流行り」とも縁遠い外国語であることからすれば、納得できる数字かもしれないが、同じ立場のスペイン語に差をつけられているのであるから、履修者増加に向けて何らかの対策をとる必要がある。

フランス語全体では履修者数は安定的に推移している一方、数年前に比べてフランス語 V、VI の受講者は減少してきている。LA 学群では外国語 8 単位必修ということもあり、卒業単位に関係ないこれらのレベルは敬遠されるということだろうか。しかしながら、パリ短期語学研修では今年度 7 名の学部生が参加し、授業以外のより上級のフランス語学習への志向は見られる。あるいは昨年度から成績評価の相対化が大学全体でなされ、フランス語科目ではそれを厳格に適用したため成績評価が厳しくなっていることに関連があるのだろうか。はたまた、I～IV までのレベルの教科内容がコミュニケーションを中心

とするのに対して、V、VIレベルが文章理解を中心とする内容になっているために学生から敬遠されているのであろうか。

しかしながら、このV、VIレベルの受講生が少なくなっている現象は他の外国語にも見られるので、これについては他の外国語担当者と一緒に原因究明と対策を講じることが喫緊の課題である。

### 3. 教科内容

フランス語を選択した初学年の学生を対象に以前にとったアンケートでは、「フランス語のイメージ」として、①「綺麗な・美しい言語、高雅・優雅・お洒落な言語」②「発音が難しそう・ヨーロッパの言語の中でも特に難しそう」③「英語と似ている」④「欧州の中心として発展している国の言語」のような回答が得られた。確かにフランス語は学生の思っているイメージ通りかも知れない。①と④に関しては、鼻母音の存在、文を滑らかに発音する仕組み（母音衝突の回避）、単語自体にアクセントを置かず文全体のイントネーションに特化などの発音上の美しさからそういった印象が生まれているのみならず、ファッション、化粧品、芸術、デザイン、料理、ワイン、観光などの分野に秀でたフランス国自体に対するイメージによるものだろう。②に関して言うと、実際に学年末の授業評価アンケートではいつも「発音が難しかった」というコメントがある。[ø]や[œ]、[R]などのフランス語独自の発音があり、これらは練習せずには出ない音であろう。それとともに、つづり字と発音に密接な関係のある言語であるフランス語においては、つづり字の発音の規則を覚えることも必要であり、この辺の学習をしないしていると、発音の難しさを感じることになる。語彙面では英語と共通するものが多いのも事実で③のような回答が出てくるのは当然である。英単語の中で抽象的なものを表す単語はほとんどフランス語を語源としているし、文法面でも文型や複数形など英語とフランス語の共通点は多い。中学・高校で英語を学んだ学生にとってはフランス語は学び易い言語であるはずである。

外国語を学ぶ多くの学生が当該外国語で外国人とオーラル・コミュニケーションを図りたいという受講動機を持っており、また文部科学省の進めている中学・高校からの「コミュニケーション能力の一層の育成」という方針とも合致する授業をフランス語科目では行っている。そのために、フランス語母語話者の担当する授業を確保すること、日本人教員間にも教育方針を徹底すること、教材もそれに適したものを使用することで、その実をあげている（つもりである）。

現在5名の日本人教師と2名のフランス語母語話者とで、春学期13クラス、秋学期11

クラスを担当。週2回の授業は原則としてフランス語母語話者と日本人教師がペアになって行うこととしている。授業では教師対全学生、教師対一学生、学生同士のペアワーク、グループワークなどを通してフランス語を身につける作業を行っている。

また文部科学省の「国際化のためには、民族固有の文化や価値観の相違に対する理解を深めることが必要である」という方針に即して、授業ではインターネットでフランスのいくつかのサイトを紹介し、文化的な見聞を広めることも行っている。すべて「国際的に活躍し得る人材の育成」（文部科学省）を目標としたものである。

#### 4. これからのフランス語授業のあり方

春・秋学期末にフランス語担当者会議を開き、学生の成績付けを共同で行い、複数の同レベルのクラスによって優や良の人数比率で不公平の無いように、成績評価の基準を統一している。その場では教科書の内容も検証し、授業目標・目的に沿うものか、受講する学生の水準にふさわしいものかを検討し、次学期の教科書選定に活かしている。

ちなみに、2008年度からの使用教科書を述べると次のようになる。

- 2008年度、フランス語Ⅰ、Ⅱ 「Spirale」, Hachette
- フランス語Ⅲ、Ⅳ 「Festival 1」, CLE International
- フランス語Ⅴ、Ⅵ 「Initial 2」, CLE International
- 2009年度、フランス語Ⅰ、Ⅱ 「Spirale」, Hachette
- フランス語Ⅲ、Ⅳ 「Festival 1」, CLE International
- フランス語Ⅴ、Ⅵ 「Initial 2」, CLE International
- 2010年度、フランス語Ⅰ、Ⅱ 「パタシュ 1」, 朝日出版社
- フランス語Ⅲ、Ⅳ 「Taxi 2」, CLE International
- フランス語Ⅴ、Ⅵ 「Vagabondages」(ビデオ教材), Hachette

2010年度に教科書を変えたのは上記の見直しをした結果である。これからも一つの教材に固執せずに、授業に適する新たな教材があれば更改していく方針である。

「コミュニケーション能力の一層の育成」（文部科学省）といっても、会話だけでその能力が育成できるわけではない。文の骨格となる文法の習得も必要となるのだが、現在の週2回のフランス語Ⅰ～Ⅳの授業では最低不可欠の文法を学ぶにとどまり、文のニュアンスの違いを感じ取れるようになるための授業にはなっていない。フランス語Ⅴ・Ⅵまで受

講すればある程度は可能となるのだが、V・VIを受ける学生が少数にとどまっている現状では、フランス語Ⅰ～Ⅳの授業でも、なんとかして、文の構造と密接に関係する文法の理解ができることを目標としていかななくてはならない。

時代の要請している教育方針を率先して取り入れているフランス語科目であるが、学生の求めているものとも折り合いをつけた実のある魅力的な授業となるよう研鑽を積む必要があることを実感している。